

【東海高校総体】ご声援、ありがとうございました。

大会後記

3分12秒86。5月の県総体1600メートルリレーで、29年間破られることのなかった大会記録を更新した。専門誌には、昨年8月4日に急逝した恩師、鈴木克哉先生への思いがインタビュー記事としてつづられている。

東海ランキング1位で臨んだ東海総体。予選を県のメンバー橋本結友（3年6組）、下田隼人（2年10組）、富山詞央（3年6組）、榊原聡真（3年7組）で通過。最終日に行われるこの競技は、どのチームも疲労を抱えながらの勝負となる。4走の榊原は初日の400メートルで4位入賞、2走の下田は前日の400メートルハードルで、大会記録に迫る好タイムで優勝、3走の富山が2位。個人種目は1日で予選、準決勝、決勝と3本走り、最終日の1600リレーの予選を走ることになる。2走の下田が疲労により負傷した。

前日の100メートルで5位入賞を果たした谷藤海友（3年5組）は、同日に行われる400リレーのアンカーとしても出場。この日5本目となるリレーの決勝では、7位でもらったバトンを2位にまで引き上げフィニッシュ。同種目1走の高柳友貴（3年11組）、2走の羽田野太智（3年7組）とともに、大きな流れをつくった。ただ、それぞれ力を使い果たし、1600リレーを走れる状況ではなかった。下田の代わりは400リレー3走を走った寺下頼檜（2年5組）に託された。

1600リレー決勝は、大会の最終種目に行われ、どの学校も総力をここに結集する。この種目未経験の寺下には大変なプレッシャーがかかる。「100メートルを11秒で通過し、抜かれても落ち着いて前に付け」最低でも6位入賞（インターハイ通過）ラインを死守するため、伊藤先生は寺下に具体的な指示を出す。普段寡黙な富山は笑顔で下田の背中を叩き、キャプテンの橋本、アンカーを走る榊原は“俺たちに任せておけ”と終始笑顔で、スタートの時を迎える。

1走の橋本はラップベスト記録で2位につけ、各チームエースが配置される2走が寺下。指示通り100メートルを11秒で通過し、1位の中京大中京に食らいつく。想定を大きく上回る快走を見せ、3位で3走へ。富山が20メートル以上離れた中京を含め、全てを抜き去り、榊原がその差を広げフィニッシュ。涙でその姿はよく見えなかった。

3分12秒35。県での大会記録を上回る記録で優勝を果たした。感動的な表彰式に寺下の姿はなかった。酸欠と熱中症症状で医務室に横たわる。最後の100メートルは記憶になかった。まさに死力を尽くして手にした結果であった。

女子400メートルハードル2位となった夏目紗彩（3年11組）とともに、6種目13名、過去最大の陣容でインターハイに向かう。今大会を振り返り、伊藤先生は「克哉先生が上から指導してるんですよ」と。

陸上部は、結果が良くても悪くても、それを支え続けてくれている人への感謝を大事にしている。競技の楽しさも厳しさも真正面から受け止め、全国を制するに相応しい競技者になれるよう、これからも走り続ける。

陸上部 顧問